

# 赤ひげ診療譚

三度目の正直

山本周五郎

青空文庫



梅雨があけて半月ほど経ったころ、狂女のおゆみが自殺をはかった。まえにも記したとおり、彼女はお杉という若い召使と二人で、病棟から離れた住居にいる。それは彼女の親が新らしく建てたもので、窓には太い格子があるし、一つだけの出入り口には鍵かぎが掛かる。ぜんたいが座敷ざしき牢ろうのような造りになっており、召使のお杉はその出入りごとに、いちいち鍵を外し鍵を掛けるのであるが、その日、お杉が炊事場で夕餉ゆうげの支度をしているあいだに、おゆみは窓の格子へ扱帯しごきをかけて、縊死いししようとした。

そのとき保本登は養生所にいなかった。彼はいつものように、新出去定の供をして外診に廻つてい、その時刻には神田佐久間町の、藤吉という大工の家で、猪之いのという男の診察をしていた。猪之はやはり大工で藤吉の弟分に当り、年は二十五歳だという。初め養生所へ頼みに来たのは、兄あにき哥分の藤吉であつた。

——ほかの医者はみんな気が狂つたといふんですが、私にはそうは思えない、猪之とは頭梁の家で子飼いからいつしよだつたし、頭梁の家を出たあとも、私が女房を貰うまでは、長屋の一軒でいつしよにくらしました。こうやって十年以上もつきあつて来て、あいつの性分も癖もよく知つてゐるんです。

だから気が狂つたなどとは信じられない。なにか病気があり、

治す方法があると思う。ぜひいちど診に来て頂けまいか、と藤吉は熱心に頼んだ。去定は承知したが、急を要する病気が少なくな  
いから、二三日のちにと約束をした。二三日というのが七日も経  
つて、その日は呉服橋の近江屋おうみという、商家の隠居を診にいつた  
ので、帰りに佐久間町へまわったのであつた。

猪之は小柄な若者で、顔だちもきりつとしているし、いかにも  
腕っこきの職人、といった感じにみえたが、いまはぐあいが悪い  
からだろう、眼はとろんとして動きが鈍く、唇にもしまりがなく、  
去定に診察されていながら、診察されているということにも、は  
つきり気がつかないようであつた。なにを訊いてもなま返辞しか  
しないし、だらしなくにやにや笑つたり、診察が終るとすぐ横に

なり、怠けたような声で、藤吉の妻に茶をくれと云った。

「あねさん」と彼はまのびした調子で云った、「済まねえが、茶をくんねえかな」

藤吉はまだ仕事から帰らず、おちよという女房が一人で応対していたのであるが、猪之にそう云われると、おちよはあいそよく立つて、手ばしこく三人のために茶を淹いれ替えた。猪之はひしまく肱うで枕くらをしたまま、ぼんやりおちよのようすを見まもっていて、ひ

よいと去定に一種のめくばせをし、顔をしかめて囁いた。

「へっ、女なんてもなあ、——ね」

軽侮と嫌悪のこもった表情であった、去定は黙って、さりげなく猪之とおちよを見比べていた。藤吉の家を出ると、街は片明り

に黄昏れかけ、湯島台の家並が高く、紫色の影になつて見えた。

「保本はどう思う」

神田川に沿つて、ひじりざか 聖坂のほうへ歩きながら、去定は前を見  
たままそう訊いた。登のうしろで、やくろう 薬籠持ちの竹造が「へ」と  
いった。自分が訊かれたと思つたらしい。登は彼に手を振つてみ  
せて、それから去定に答えた。

「私は気鬱症だと思ひます」

「都合のいい言葉だ」と去定は云つた。「高熱が続けばおこり瘧、咳が  
出れば労咳、内臓に故障がなくてぶらぶらしていれば気鬱症、  
—おまえ今日からでも町医者ができるぞ—

登は構わずに反問した、「先生はどういうお診たてですか」

「氣鬱症だ」と去定は平気で答えた。

登は黙っていた。

「明日おまえ一人でいつてみる」と去定は坂にかかつてから云つた、「藤吉と二人の、昔からのことを詳しく訊くんだ、あのおとり当人はなにも云わないから、藤吉に訊くよりしようがない」

「どういふことを訊きますか」

「なにもかもだ」と去定が云つた、「詳しく聞いているうちには、これが原因だと思ひ当ることがあるだろう、そうしたらその点を中心ただに納得のいくまで訊き糺すのだ」

それほどの必要があるのか、登はそう問い返したかつた。養生所の生活に馴れるにしたがつて、医者がまずなにをしなければな

らないか、ということに登もほぼ理解するようになった。そして現在、養生所はもとより外診でも、去定の手を待ちかねている病家がずいぶんある。それに比べれば、猪之などは病人ともいえな  
いし、そんな手間をかけて治療する必要があるとは思えなかつた。  
——うっちゃっておけばいいじゃないか。

そう云いたかつたのであるが、去定がそのくらいのことを知らないわけがないし、命ずるからにはそれだけの理由があるのだらうと思ひ返して、よけいなことは云わないことにした。

養生所へ帰つたのはちようど夕食の時刻で、登は洗面し着替えをすると、森半太夫に声をかけて食堂じきどうへいった。半太夫の部屋からは返辞が聞えず、食堂へいってみると、彼はもうそこで食事

を始めていた。

登が膳ぜんに向かうのを待つて、半太夫はおゆみのことを話しだした。しかしすぐに、なにか気づいたようすで、ぶきように慌てて、話をそらそうとした。おゆみと登とのことを、まだ気にしているのである。登にとつてもそのときの傷は、まだ心に深く残つてゐるが、そんなふうには遠慮されることのほうが、却かえつて重荷に感じられた。

「それでどうした」登はこつちから話を戻した、「助からなかつたのか」

「いや助かつた、危ないところだったが」と半太夫が答えた、「扱しご帯きで縊くれた痕あとがひどいし、声もすっかりしやがれてしまった、

顔も腫れたままだが、腑におちないのは、縊死しようとしたのは気が狂ったからでなく、どうやら正気でやったことらしいんだ」

登は箸を止めて半太夫を見た。

「あとで新出さんに診てもらおうと思うんだが」と半太夫は陰気に続けた、「私の診たところだと、だんだん正気でいる時間が長くなって来て、自分の狂っていることや、檻かんきん禁きんされているという事実がわかり始めた、そのために絶望的になって、自殺しようとしたのではないかと思うんだ」

登はちよつとまをおいて云った、「あれは頭が狂っているのではなく、躰たいしつ質しつからきたものなんだがね」

そして軽く笑いながら付け加えた、「今日はこつちも妙な病人

を診て来たよ、もしあの娘が死んでいたら、代りにあの住居へ入れるかもしれないような男さ、——おまけに、明日から私はその男の診察を仰せつかってしまったよ」

## 二

翌日、登はまだ暗いうちに養生所を出た。

去定の供をしているあいだに、足のほうもかなり達者になり、佐久間町へ着いたときには、藤吉はまだ家で飯を喰べていた。登はおちよに藤吉を戸口まで呼んでもらい、去定から命ぜられたことを告げた。

「猪之はまだ寝ていますが」と云つて、藤吉は頭を搔かいた、詳しい話をするには、うちではちよつとまずいんですがね」

「仕事場へいってもいいよ」

「仕事は代つてもらえるんですが」藤吉は気の毒そうに云つた、  
「頭梁に断われれば代つてもらえるんですが、堀江までいって下さいますか」

「仕事を休むことはないだろう」

「話すならゆつくり話したいし、なに、いまの帳場はあつしでなくつてもまにあうんです、じゃあちよつと飯を片づけちまいますから」

登は外へ出た。

そこは佐久間町四丁目で、うしろが神田川になっている。家は二戸建てだが、格子戸のある小ぢんまりした造りだし、隣り近所も似たようなしもたやが多く、下町にしては閑静な一画をなしていた。——出て来た藤吉は、着流しにひらぐけをしめ麻裏をはいていた。仕事は休むつもりらしい、待たせて済みません、と云って歩きだしたが、ふと思いついたように立寄り、ちよつと見ておいてもらいたいものがあると、家の脇を裏へまわっていった。裏にはもうひとかわ、神田川に面した家が並んでおり、こっちの家とのあいだに、幅九尺あまりの空地があつた。そこは両方の家の勝手口が向き合っていて、井戸もあるし、手作りの棚に盆栽を飾ったり、竹垣をまわして、植木や花を育てていたりした。

「これを見て下さい」

藤吉は自分の家の勝手口のところ、そう云いながら、そこに並んでいる植木鉢を指さした。安物の素焼きの鉢が七つあり、それぞれなにか小さな苗木が植わっているが、登にはそれがなを植えてあるのか、まったく見分けがつかなかった。

「猪之が植えたんですよ」と藤吉は勝手口のほうを気にしながら云った、「よく見て下さい、みんな逆ささかまです」

「逆さまとは」

「枝のほうを埋めて、根を上へ出してあるんです」

登はほうと云った。なるほど、よく見ると鉢の土から出ているのは根である。もっともみな根を上にして植えてあり、それでな

んの木かわからなかつたのであつた。

「どうしてこんな植えかたをしたんだ」

「それはあとで話します」と云つて藤吉は歩きだした。「いきましようか」

あたらし橋を渡つて、日本橋のほうへ向かいながら、藤吉は話し始めた。

猪之は藤吉より二つ年下で、十二歳のとき、日本橋堀江の「大<sup>だ</sup>いまま政」という、大工の頭梁の家へ弟子入りをした。藤吉は三年まえから大政にいたが、六人いる弟子たちの中ではいちばん新参でもあり、年も若く、しぜん誰よりも猪之と親しくなつた。

「猪之は頭のいいやつで、すばしっこいし手も口もまめで、半年

と経たないうちに、大政のにんき者になり、猪之、猪之とみんなから可愛がられるようになりました」

彼は大政の中だけでなく、近所の人たちにも評判がよく、ふしぎと女の子に好かれた。大政にはおしづとおさよという二人の娘があり、そのとき姉は十歳、妹は七歳だったが、姉妹はもとより、彼女たちの遊び友達もみんな猪之を好いていた。

——あたし大きくなったら猪之さんのおかみさんになるのよ。

——あらいやだ、あんたみたいなおかめを猪之さんが貰もらうもんですか、あのひとのお嫁さんになるのはあたしよ。

女の子が四五人で遊んでいると、よくそんな口喧嘩げんかをしたものである。それを云ってからかうと、猪之は赤くなって怒った。

——へっ、と猪之は云う。へっ、なんでえ女なんか、かみさんなんか貰うかい、女なんてみんななつちやねえや。

そして幾たびも「へっ」と云い、暫くは彼女たちに近よらないのであつた。お手玉、おはじき、毬まりつき、なんでもきようにやつてのけるし、さっぱりした気性と顔だちがいいのついで、女の子たちに好かれるのは当然だが、猪之自身は誰にも特別な関心はもたなかつた。おしづやおさよも例外ではなかつたし、誰かが特に親しそうなふりでもすると、無情なほど手きびしくはねつけた。

「はたちになるまでそんなふうでした」と藤吉は云つた、「つまらねえことを話すようですが、あとのことにかかわりがあるんで聞いてもらいます」

登は黙って頷いた。

「職人のこつてすから、としごろになると近所の娘とできたり、兄弟子たちにさそわれて遊びにでかけたりするもんです」と藤吉は続けた、「正直のところあつしもそのくちでしたが、猪之だけはべつでした、町内にずいぶん色眼を使う娘たちがいるのにてんで見向きもしない、兄弟のように仲の良いあつしがさそつても、いちどだつて遊びにいったことがない、あいつは片輪だろうなんて、兄弟子たちがよく云つたもんでした」

藤吉が二十三、猪之が二十一の年に、二人は大政を出て家を持った。大政でおしづに婿を取り、子供が生れたうえに、新らしく弟子が三人はいったり、子守が雇われたりしたので、寝起きがう

るさくなつたからでもあつた。

住居は田所町の裏長屋で、大政に近く、飯は朝夕とも頭梁の家で喰べたし、洗濯などもみなやつてもらつた。払うのは店賃だけだから、一年ちかいあいだ二人は暢気にくらしたが、猪之はやつぱり女をよせつけない。二人ぐらしで藤吉が遊びにでかけるのに、彼は独りであとに残つた。酒は好きな性分とみえて、そのじぶんにはかなり飲むようになったし、酔うと陽気になるいい酒だつたが、いくら酔つていても「くり込もうか」と云うときつぱり首を振る。

——あにきいつて来いよ、おれはいやだ。

判で捺す<sup>お</sup>ようにそう云うだけであつた。ところが二十二になつ

た年の二月、猪之はきおいこんで藤吉に云った。

——嫁に貰いたい娘がいるんだ、あにきいって話をつけて来てくれ。

頼むと云つて頭をさげた。

「ここが頭梁の家です」藤吉は話をやめて立停った、「ちよつと待つていて下さい、断わつてすぐに来ますから」

### 三

間口五間ばかり、二階建ての大きな構えで、二枚あけてある障子に「大政」と書いてある。はいつていつた藤吉はすぐに出て来

て、堀に沿った道を南のほうへ歩きだした。

「知っている船宿があるんです、そこで一杯やりながら話しましょう」

「こんな時刻にか」

「水を眺めながらの朝酒」と云いかけて、藤吉は苦笑した、「こいつは月並すぎたか」

船宿は小舟町三丁目の堀ほり端ばたにあつた。古ぼけた小さな家で、

それでも二階に二た間あり、とおされた表の六帖じようの障子をあけると、堀の対岸に牧野河内の広い屋敷があり、邸内の深い樹立こだちが眺められた。

「とにかく恰好だけつけましょう」

藤吉はそう云つて酒を注文した。

「猪之が嫁に欲しいというのは、同じ田所町にある居酒屋の娘でした」と藤吉は話し続けた、「年は十七だったでしょう、お孝という名で、顔もからだ軀もまるまると肥えた、おそろしくがらっぱちな女でした」

藤吉は冗談はよせと云つた。選よりに選つてあんな女を貰うなんて、ばかにでもなつたのか。冗談じゃねえ本気だ、と猪之はいきり立った。あにきにはあんな女かもしれないが、おれはどうしても女房にしたいんだ、頼むからいつて話をまとめて来てくれ。そう云うようすが正まさしくしんけんそのもので、眼の色さえ変つていまるようになつた。

——本当に本気なんだな。

藤吉は念を押し、それからその話を持っていった。娘の親は大  
吉といい、これも初めは冗談だと思った。娘のお孝も「からかつ  
ちやいやだよ」などと云っていたが、母親のおらくは藤吉を信じ  
て、自分から亭主や娘をくどいた。それで大吉は折れたが、一人  
娘だから嫁にはやれない、婿に来るなら承知しよう、という条件  
を出した。

そこまではこぶのに五日ばかりかかった。婿と聞いて、さすが  
に猪之も考えこんだが、すぐ意を決したといった顔つきで、婿で  
もいい、と云いきつた。

——よく考えてみる、猪之、おめえはまだこれからっていうか

らだだぞ、いちにんまえの職人になるつもりなら、これからが腕のみがきどきだ、ここで二た親付きのかみさんなんぞ背負いしよこんだら、一生うだつがあがらなくなるぞ。

——このおれがかい、へっ。

猪之はそう云つて、肩を揺りあげただけであつた。藤吉はその縁談をまとめた。

——祝言はいつにするつもりだ。

話がまとまったのでそう訊くと、猪之はそうせかせるなど答えた。話はきまつたんだから、いそぐこたあねえさ。しかし、と藤吉は云つた。向うだつて都合があるだろうし、およその日取を知らせるのはおれの役目だ、どうする。そうさなと猪之は首をひね

った。そうさな、それなら秋ということにでもしておくか。秋だつて。うん、おれにだつて都合はあるからな、と猪之は云つた。

「当分のうちみんなに黙っていてくれ、と猪之は諄くくど云いました」と云つて藤吉はぬるくなつた茶を啜つた、「すると半月ばかりして」

船宿の女房が酒をはこんで来た。二つの膳ぜんにはそれぞれ爛徳利かんと、摘み物が三品ばかり並べてあつた。勝手にやるから構わないでくれ、と藤吉が云い、女房はすぐに去つていった。

「一つだけいかがですか」

「私はだめだ」

「じゃあ、失礼します」

藤吉は手酌で、舐めるように飲みながら、話を続けた。

半月ほど経った或る日、猪之は藤吉に向かつて、あの縁談を断わってくれ、と云いだした。藤吉はいきなりどやしつけられたような感じで、猪之の顔をみつめたまま、暫くはものが云えなかつた。

——あにきには済まねえが、あの娘はだめだ、てんでなつちやねえんだ。

ちよつと待て、と藤吉は遮った。いったいどうしたんだ、なにがだめだ、あの娘のどこがなつちやねえんだ。

——おれはゆうべ飲みに行った。

——念には及ばねえ、おれもいっしょにいったんだ。

——あにきは一と足さきに帰った、と猪之は云った。おれもすぐに帰ったが、お孝のやつが追っかけて来て呼びとめた、どうしたと訊くと、側そばへよつて来て手を握りやがった、それでおれは、また、どうしたんだと訊いた、お孝のやつはへんに気取った溜ためい息きなんかつきやあがつて、それから握っている手にぎゅつと力をいれて、一生捨てないで——つて云やあがつた。

猪之は右の掌てのひらを着物へこすりつけた。なにか粘った物でも付いているように、二度も三度もこすりつけ、そして顔をしかめた。

——それがなつちやねえのか。

——おれは吐きそうになった。あにきは知らねえだろうが、あぶら汗で温かい、ぼつてりした手でぎゅつと握られ、一生捨てな

いでなんて、それがまた甘ったるいへんな声なんだから、おれは断わりなしに背骨を抜かれちまったような、いやーなところもちになつて逃げだして来たんだ。

——これから夫婦になる者が、一生捨てないでくらのことを云うのはあたりめえじゃねえか。

——あにきは云われたことがあるか。

——世間一般のことを云つてるんだ。

——云われてみな、一遍、そうすりやあこの穴ぼこへおつことされるような気持がわかるから。

——いろいろなことを云やあがる。

吐きそうな気持だの、断わりなしに背骨を抜かれたようなこと

ろもちだの、こんどは穴ぼこへおつことされるような氣持だのつて。やい、背骨なんてものは断わつてから抜くものか。だからよ、と猪之は云つた。抜かれねえさきに断わろうつていうんだ。

「勝手にしやあがれ、つて私は云つてやりました」と藤吉は云つた、「おれは話をまとめるために骨を折つた、断わるんなら自分でやれ、おれはまつぴらだ」

猪之は断わつたらしい。先方からなにも云つて来なかつたから、断わつたものと思われるが、それでその居酒屋へはいきにくくなり、六丁もはなれた住吉町に河岸かしを替えなければならなかつた。

「そいつがきつかけになつたんでしようか、それからはのべつ女にちよつかいを出すようになりました」藤吉は手で会釈をして、

登の膳にある爛徳利を取った、「しかもあいつらしく、向うからもちかける女には眼もくれない、まえにも云ったとおり、昔から女の子にはもてるやつでしたが、どういうわけかそういう女には決して手を出さない、つんとすまして、そつぽを向いてるような女に、こつちから熱をあげるんです」

#### 四

その年の冬になつてから、猪之はまた「嫁にもらいたい女がある」と云いだし、藤吉に口をきいてくれと頼んだ。ちようどそのとき、藤吉にも縁談が始まっていた。相手は「大政」から出た大

工の娘で、大政の頭梁から話があり、よければ仲人をする、と云われていた。それがいまの女房おちよで、藤吉は承知したものの、会ってみるとひどくまだ子供っぽかった。十六だというが、顔つきも細いし、気持も娘になりきっていないようで、夫婦になるのがいたいたいように思えた。

——少し考えさせて下さい。

頭梁にはそう答えておいたが、そこへ猪之が話をもちだしたのであった。

こんども居酒屋の女であった。住吉町の「梅本」という、ちよつとしやれた店で、女はおよのといい、年ははたちぐらいにみえた。その店へ雇われてからまだ五十日足らずだったが、酒も強い

し客あしらいも手に入つたもので、すっかりにんき者になつて  
た。

——あれはよせ、あれはいけねえ。

藤吉は首を振つた。はつきり云いきることはできないが、あれ  
はずぶの素人じゃあない。少なくとも男を知つてゐることは慥たしかだ  
し、あんなに飲むようでは世帯しよたいがもたない。あれだけは思い切  
るほうがいい、と藤吉は強く反対した。

——あにき、おれはしんけんだけ。

猪之は坐り直した。酒は客の相手だから飲むが、自分の世帯を  
持てば飲まなくなるだろう。四日市の重平さんのかみさんを見て  
くれ、と猪之は云つた。重平というのは、やはり「大政」から出

た大工で、四日市町に住んでいる。女房のおつなは料理茶屋の女で、はたらいているあいだは浴びるほど飲んだというが、重平といっしょになったとたんに、ぴったり盃を手になくなり、世帯のきりまわしもうまいので、なかまうちの評判になつていた。

——それに、もう男を知つてるようだつていうけれども、と猪之は続けた。あにきは遊び馴れているくせに、世間のことを知らなすぎるぜ。

——おれがなにを知らねえんだ。

——女のことをよ、と猪之は云つた。昔はどうだかわからねえが、当節はね、きむすめ生娘のまままで嫁にゆく女なんて、千人に一人、いや、五千人に一人もいやあしねえぜ。

——おめえ知ってるのか。

藤吉はひらき直って反問した。おれも近いうちに嫁を貰うことになつてる、相手がかきがらちよう蠣殻町の娘のおちよだつてことはおめえも知ってるだろう、おちよも生娘じゃねえつていうのか。冗談じやねえ、と猪之は赤くなつた。よしてくれ冗談じやねえ、おらあそんな、だれかれと人をさして云つてるんじやあねえ、うん、とそこで猪之は頭を反らした。

——おらあ世間一般のことを云つてるんだ。

——きいたふうなことを云うな。

——いつかあにきがいったことだぜ。

——なぞるにやあ及ばねえや。

藤吉は「梅本」へ掛合いにいった。自分も縁談があつたときだし、猪之のようすがきまじめなので、ついそうする気になつたのだらう。およのは承知した。彼女は十八だといつたが、やつぱりはたちにはなつていたようで、妹が一人どこかに奉公しているほか、面倒をみなければならないような者はなかつた。

——あたしいいおかみさんになるわ。

およのはそう云つて、しおらしく眼を伏せた。藤吉は「梅本」の主人夫婦にも話して、その縁談をまとめた。それから猪之にそのことを知らせると、彼はべそをかくような笑いかたをして、ありがてえ、と云つた。

——おいどうしたんだ。

話はきまつたんだぜ、嬉しかあねえのか、と藤吉は訊きいた。

——ありがてえつて云つてるじゃねえか、ありがてえよ、ほん  
とだぜ。

——わかつたよ。

藤吉は猪之の顔を見まもりながら、なんの理由もないのに、背筋がひやつとするのを感じた。

「年が明けたら祝言をしよう、ということになりましたが」と藤吉は云つた、「正月の松が取れるとすぐ、あつしは水戸へゆくことになった、水戸の相模屋さがみという、海産物商の隠居所を建てる仕事で、大工、左官、建具屋など、二十人ばかりの職人を使うことになったんです、その下準備ができて、江戸を立つ三日まえのこ

とでしたが、猪之が急におれも伴れていつてくれと云いだし  
ました」

もう人選びはきまつたからだめだ、頭梁が許しやあしないと云  
いながら、ようすを見るとどうもおかしい。なにかあつたのか、  
と藤吉は訊いた。うん、と猪之はもじもじしていたが、やがて、  
度胸を据えたという顔つきで云つた。

——嫁に欲しい娘がいるんだ、済まねえがあにきに口をきいて  
もらいたいんだ。

藤吉は息をしずめてから訊き返した。

——もうその話はきまつてるじゃねえか。

——いや、いま初めて頼むんだ。

——梅本のおよのじやあねえのか。

——もちろんそうじゃねえさ。

藤吉は怒りを押えるのに暇がなかった。

——梅本のおよのはどうするんだ。

——断わっちまうさ、あんなあま、と猪之は唇を曲げた。いま  
になってみると、どうしてあんな女に惚ほれこんだかわけがわから  
ねえ、正直のところ自分で自分が訝おかしいくらいなんだ。

——おい、よく聞け猪之。

——わかつてるよ、あにきが怒るだろうってことはわかつてる  
んだ、と猪之はせきこんで云った。ほかの者ならこんなことを頼  
めやあしねえ、あにきだからこそ、怒られるのを承知で頼むんだ、

三度目の正直、こんどこそまちげえのねえ娘なんだから。

藤吉はじつと猪之の眼をみつめた。

——そんな娘がいるのに、どうして水戸へゆこうというんだ。

——それあその、梅本のほうを暫く。

——暫くどうだつてんだ。

猪之は頭を搔き搔き、つまり暫くほとぼりをさまそうと思うんだ、と云った。

「あつしはどなりました、どなりつけてやりました」藤吉は酒がなくなつたのに気づき、登に向かって爛徳利を振ってみせた、

「もうちつとやりてえが、御迷惑ですか」

「いいとも」と登は頷いた。

藤吉が手を叩くと、階下で返辞が聞え、ころあいを計っていたのだろうか、まもなく女房が爛徳利を二本持つて来た。

「しかしつまるところ、どなるほうが負けというやつですかね」と手酌で一と口噉りながら藤吉は話し続けた、「やりこめるだけやりこめたあげくが、猪之の思う壺にはまったかたちで、だらしのねえ話だが、また掛合いにゆきました」

こんどの相手は近江屋という、足袋たびももひき股引問屋の女中で、お松という十八の娘であった。

## 五

近江屋は浅草御門外の福井町にあり、奥座敷の模様替えをするため、去年の冬のはじめに一と月ばかり「大政」から職人をいれた。そのとき猪之は、お松にいろいろ親切にされ、すっかり好きになったのだが、嫁に貰うということは考えなかつた。それが、「梅本」のおよのと縁談がまとまつたとき、とたんにお松を思いだし、かみさんにするならお松だと肚はらをきめた、ということであつた。

「幸いお松のほうでも猪之におぼしめしがあつたようで、話はまとまるようすでしたが、こんどはあつしも用心した」と藤吉は云つた、「それで、水戸の仕事が終つて、帰つてから話をきめる、それまでは内談ということにしておこう、ということ、猪之に

も納得させました」

藤吉は水戸へゆき、相模屋の普請にかかった。仕事のことは関係がないから略すが、隠居という人が例の少ない凝り性で、初めに契約した図面に幾たびも手を入れるし、普請場に付きつきりで文句を云つたり、終つた仕事をやり直させるといふ始末で、藤吉はいきりたつ職人をなだめたり、隠居を説き伏せたりするのに精をきらした。そんなふうだから仕事もはかどらず、雨の多い年でもあつたが、棟上げまでに四十日近くもかかった。こうして三月になり、江戸から建具屋が職人を伴れて来たが、そのすぐあとで猪之がひよつこりあらわれた。

——頭梁がいけと云つたから来た。

彼はそう去った。大工の仕事はもう手が余っている、半分は江戸へ帰そうとしていたときなので、藤吉はおかしいなと思い、なにかわけがあるんだろうと問い詰めた。

——じつはおれから頼んだんだ、と猪之はぼつが悪そうに云った。おれはあにきが側そばにいねえと、年寄りの男やもめみたようなところもちになつちまうんだ。

——おい、正直に云え猪之、なにがあつて江戸にいられなくなつたんだ。

——あにきも疑ぐりぶけえ人間だな。

——云つちまえ、なんだ、梅本の話か。

——冗談じゃあねえ、あれからすぐに、あいつのほうははつき

り断わっちゃったさ。

——じゃあなんだ。

藤吉は手を緩めずにたたみかけた。やがて猪之は隠しきれなくなり、それなら本当のことを云うが、あにき怒らねえか、と神妙な眼つきをした。わからねえ、と藤吉は答えた。怒るか怒らねえかは聞いたうえのことだ、云つてみる。弱つたな、と猪之は云つた。

——こいつは弱つた、猪之は口の中で、しかし藤吉に聞えるように<sup>つぶや</sup>呟いた。こいつはまるで首の座に直つたようなもんだ。

藤吉は黙っていた。それで猪之は、いかにも閉口したように、<sup>ども</sup>吃り吃り白状した。ひと口に云うと、近江屋のお松がいやになつ

た、あの話は断わってもらいたい、というのである。藤吉はかなり長いこと眼をつむつて、怒りのしずまるのを待った。

——おめえは三度目の正直と云つた、と藤吉は忍耐づよく云つた。こんどこそまちげえのねえ相手だと云つたろう。

——そう怒らねえで聞いてくれ。

猪之は手を振りながら遮さえぎつた。慥たしかに自分はそう思った、とこ

ろがこのあいだ、お松に暇ひまが出たので、さそい合わせて浅草寺へ

参詣さんぎにゆき、その帰りに駒こま形がたの鰻うなぎ屋やで飯いを喰たべた。鰻うなぎが焼やけ

て来るまで、酒を飲みながら話をし、お松にも盃さかずきを差した。お松

はいやがったが、盃さかずきに三つばかり飲み、すると顔がぼうと赤みを帯びて、身みごなしや眼まなこつきがたいそう色いろつぽくなつてきた。それ

はいい、そこまではいいんだが、やがてお松は酌をしながら、斜は交すかいにこつちをにらんで、浮気をしちやあいやよといった。

——浮気なんかしないで、あたしはあなたのもの、あなたはあたしのものよ、よくつて。

おらあ総身がぞつとなつた。

——きまつてやがら、と藤吉が云つた。また背骨をどうかされたような気持がしたんだろう。

——あにきはなんとも感じねえか。

——夫婦になる者なら、そのくらいのことを云うのにふしぎはねえだろう。

——あなたはあたしのもの、うっ。

猪之は本当に肩をすくめて身震いをした。それはちようど、毛虫の嫌いな者が衿首えりくびへ毛虫を入れられでもしたような、しんそこ肌あわだが粟立つという感じであつた。

「しようがねえ、追り返すのも可哀そうだから、そのまま水戸へ留めておきました」と藤吉は云つた、「但し、あつしは但しと念を押しました、もうこんどは女に惚れるな、おれは二度とふたたび縁談にはかかわらねえからつて」

猪之はほつとしたように笑つて云つた。

——もう決して迷惑はかけねえ。

その代り近江屋のほうは頼む、と猪之はぬけめなくつけこんだ。いいだろう、と藤吉は引受けた。こんなこともあろうかと、正式

な話は延ばしてあったので、断わるのもそれほど困難ではないと思つたからである。

相模屋の普請は長びき、二度も「大政」の頭梁が江戸から見に来たくらいだった。それでも梅雨にかかるまえには仕上げることができた。だがこのあいだに、猪之はまたかみさんを見つけたのであつた。自分からは云いさなかつたけれども、水戸へ来て半月ばかりすると、ようすがおかしくなつた。職人たちは普請場に建てた小屋で寝泊りをしていたが、藤吉は頭梁代理なので、相模屋が地内に家を一軒あけてくれ、食事なども賄つてくれた。「猪之もあつしのところへ置きましました、なにしろ側にいねえと年寄りの男やもめみてえな気持になるつてんですからね」藤吉は酔

い始めたらしく「ふざけた野郎でさあ」と云つて笑つた、「相模屋で晩飯に酒をつけてくれるんだが、猪之が盃に手を出さなくなつた、初めは欲しくねえというんで、こつちはただそうかと思つていました」

そのうちにおかしいなと気がついた。

風呂からあがつて膳に向かう。猪之はとぼんと坐つたまま、盃も取らずに膳の上を眺めている。どうした、飲まねえのか、と藤吉が訊くと、うん、となま返辞をするだけで、いつまでも膳の上を眺めている。

——どうしたんだ、飲まねえのか。

——うん、欲しくねえんだ。

——腹ぐあいでも悪いのか。

——腹に別状はねえ、おれはいいからあにきは勝手にやってくれ、おれのことはいいんだ。

そんなことが四五日続き、或る日、同じような問答をしながら、藤吉はふと、背筋がひやつとするような感じにおそわれた。あのとときと同じだ、と藤吉は思い、それからできるだけ、猪之のほうを見ないようにしていた。

## 六

けれどもやがて、藤吉は辛抱がきれてきた。猪之は巧みに藤吉

の気をひき、じわじわと攻めて、白蟻しろありが柱の芯しんにくいこむように、藤吉の心の中にくいこんで来た。

——はあつ、と猪之は溜息をつき、膳の上を眺めながら、しんとした声で、けれども藤吉には聞える程度に独り言を呟く。だめだ、そんなことはできねえ、約束したんだからな、男がいったん約束したんだから、いくらなんだつてもういけねえ。

そしてまた大きな溜息をつき、ぼんやりと膳の上を見まもっている、というぐあいであつた。或る日、みすみす罍わなにかかると知りながら、ついに藤吉は口を切つた。

——どこの女だ。

猪之はしらばつくくれた顔で、「え」と不審そうに藤吉を見た。

——とぼけるな、また女だろう。

猪之は頭を垂れた。

「あいつも猾ずるいがあつしも利巧りこうじゃあねえ、かたちからするとこつちが乗り出した恰好で、あいつの云い草じゃねえが、まったくなつちやあいません」

猪之はしぶしぶ返辞をした。相手はせんたく町というところの小料理屋の女で、年は二十、名はおせいといった。その店へは藤吉もよく飲みにゆくので、おせいとも顔なじみだった。「いなば」というその店は堅い小料理屋だが、せんたく町は江戸の岡場所に似たようなところだから、そんなにむずかしく構える必要はない。自分で当ってみろ、と藤吉は云った。猪之は「うん」といったま

ま、しよげきつた顔で溜息をつくばかりだった。どうしたんだ、自分じゃあやれねえのか。うんだめなんだ、顔を見るとものが云えなくなつちまう、名を呼ぶこともできねえんだ。

——断わっておくが、と藤吉は云つた。こんどはおれを頼りにしねえでくれよ、おれはもうまっぴらだからな。

——わかつてるよ、いいんだ、どうかおれのこととは心配しねえでくれ。

そして猪之は口の中で、「三度目の正直なんだがな」と呟いた。藤吉は聞き咎とがめた。三度目の正直とはなんだ。なんでもねえ、と猪之は低い声で答えた。これまで好きになつた女が幾人かいた、その中でいちばん好きになり、本当にかみさんに欲しいと思つた

のはこれが三度目で、おまけにこんどこそ本物だということがわかつたんだ。

——おい、よく考えてみる、と藤吉は云った。なにが三度目だ、こんどはもう四たび目になるぜ。

——そんなこたあねえさ、いいか、およのにお松で二度だろう。

——初めのお孝はどうした。

——お孝だつて、へつ、と猪之は肩をすくめた。あんなのは数の内にへえりやあしねえや。

——だつてお松のときに自分で、これが三度目の正直つて云つたじゃあねえか。

——のぼせてたからそんな気がしたんだろう、こんどこそ本当

に三度目の正直なんだ。

本当だぜ、と猪之は力をこめて云った。

「あつしはできるだけだけそっぽを向いてました」藤吉は盃をぐつと呷あおった、「けれども、つまるところはこっちの負けです、辛抱比べではてんで勝負にはならねえ、あつしはいなばへ掛合いにいきました」

それは普請の引渡しをする二三日まえのことで、おせいは承知をし、猪之と二人で話したいと云った。

おせいのほうでも猪之が好きで、猪之さんのような人となら苦労をしてみたいと、「まえから片想いに想っていたんですよ」などと云うのであった。

——いい面の皮だ。藤吉はその話を猪之に告げてから云った。まるで人ののろけの使いをするようなもんだ、自分で自分のお人好よしにあいそがつきたぜ。

——済まねえ、と猪之は頭をさげた。

——御挨拶だな、それつきりか。

——まったく済まねえ。

見ると猪之はしらけた顔で、はずんだようなようすは少しも感じられなかった。いつて話して来い、と藤吉は云った。もう二三日すると江戸へ引揚げるんだ、いそがねえと置いてつちまうぜ。うん、そうしよう、と猪之は答えた。そうしよう、いつてあいつと話して来よう。

「猪之はでかけてゆきましたが、半刻ばかりすると帰って来て、おれはこれからすぐ、一と足先に江戸へ立つ、と云いだしました」  
藤吉はあつけにとられた。

——あいつがいつしよに江戸へゆくつて云うんだ、冗談じゃあねえ、と猪之はそわそわしながら云った。猫を番つがわせやあしめえし、そうおいそれと背負わされて堪るかってんだ、冗談じゃあねえ、まっぴら御免だ。

——おい、おちついてわけを話せ、いったいどういふことなんだ。

そんな暇はない、と猪之は答えた。わけは江戸へ帰つてから話す、おせいのやつ怒つてたから、ここへ押しかけて来るかもしれ

ない。もしやって来たら追い返してくれ、ともかくおれは先に立たせてもらおうから。そう云いながらさつと身支度をし、草鞋わらじの緒もろくさましめずにとびだしていった。そして、藤吉が怒るにも怒れず、坐ったまま唸っていると、引返して来た猪之が戸口から覗のぞき、ベそをかくようなあいそ笑いをして、去った。

——あにき、江戸へ帰ったらおれを、気の済むまでぶん殴ってくれ。

おせいおせいは来なかった。押しかけては来なかったが、職人が飲みに行ったら、酔っぱらってさんざんに毒づいたそうである。あんなやつは男ではないから始まって、江戸の人間ぜんたいを泥まみれにし、粉こなごなにし、「土足で踏みにじるようなあんばいだった」

ということであつた。

「これでひととおりの話は終りです」と藤吉は二本めの徳利を取つて、手酌で注ぎながら云つた、「江戸へ帰つてからまもなく、あつしのほうの縁談が急に進んで、五月の末におちよを貰い、あつしたちは佐久間町のいまのうちへ移りました」

「その」と登が訊いた、「水戸のおせいとはどういふことがあつたんだ」

「なんにもなかつたんです」と藤吉は答えた、「猪之が話しにゆくと、奥に小部屋があるんですが、おせいはそこへ案内して、いきなりうれしいわと抱きついた、もうすぐ江戸へ帰るそうだけれど、そのときいつしよに伴れていってくれ、だま騙すと承知しないと

云ったそうです」

「それでまたいやになったのか」

「まったく理屈に合やあしねえ」と藤吉は云った、「こつちから惚れていて、かみさんに欲しいとまで思いこんでいながら、相手がちよつとなにか云うと、——それも愛情が云わせるごくあたりまえなことなのに、その一と言でがらつと変つちまう、おぞ毛をふるうほど嫌いになつちまうんですから、あつしにはその気持がどうしてもわかりません」

## 七

登はその夜、新出去定にその話をした。おそらく興味はもつまいと思つたが、去定は関心を唆そそられたようすで、それからどうした、とあとを促した。

藤吉夫婦が佐久間町へ移つたあと、猪之はいちど頭梁の家へ戻り、半年ほどして久右衛門町の長屋へ住みついた。藤吉の家へ出入りするのには、堀江には不便だからだろう。なにしろ三日と顔をみせない日はないので、新婚早々のおちよはずいぶん驚いたという。久右衛門町へ移つてからは、朝早く藤吉を迎えに来て、水を汲みこんだり家のまわりの掃除をしたりする。それからいつしよに仕事にでかけるが、日が昏くれるとまたあらわれて、藤吉が寝ようと云うまで帰らない、というぐあいであつた。

藤吉が世帯を持って以来、女のこととて面倒は起こさなくなつた。相変らず遊びにはいかないし、仕事さきや飲屋などで、女たちのほうからさそいかけるようなことがしばしばあるが、まったく知らぬ顔で見向きもしなかつた。——ようすが變つたのは、去年の暮からであつた。普請場へいつても仕事をせず、一日ほかんと手を束つかねている。どうしたと訊くと、どうもしねえと答えるだけで、やっぱりなんにもしない。ときたま鉋かんなか鑿のみを持つと、棟上げの濟んだ柱へ穴をあけたり、紙のように薄くなるまで四分板を削るといふような、とんでもないことをやりだす。

——こいつはおかしい。

藤吉はそう気づいたから、頭梁に話して少し休ませることにし

た。するとこんどは長屋の差配が苦情を云つて来た。べつに乱暴はしないが、ようすがおかしいので相長屋の者たちが気味わるがつて困る。なんとかならないものかというのである。猪之は品川の漁師の三男で、実家にはまだ父親がいるし、兄が一人と妹が二人いた。親子きょうだいの縁がうすいともいうのか、何年にも往き来をしないけれども、親子には違いないのだから、品川のほうへ引取らせたらどうか、と藤吉が云つた。ところが、それを聞いていたおちよが、「それは可哀そうだ」と反対した。

——そんな縁のうすい親許へいったって、いたわ 助つてくれるかどうかもわからない。

猪之さんはあんなにおまえを頼りにしているし、実の親きょう

だいよりも慕っているようだ。うちにはまだ子供もないことだし、いつそうちへ引取つてあげるほうがいいでしょう。おちよが熱心にそう云うので、正月中旬に佐久間町へ引取つた。

それから約半年、医者に診せたり、いろいろと薬をのませたり、きとう祈禱や呪まじない禁までやってみたが、少しもよくならない。もつと尤も、ひどく悪化するのでもなかつた。着物を裏返しに着、三尺を前でしめたまま歩きまわつたり、昼のうちぐうぐう眠つて、夜は横にもならず、藤吉にどなられるまで独り言を云つたり、鼻唄をうたつたりする。というふうな程度であるが、ただ一つ、どうしても仕事をしようとしないうところに、病氣のもとがあるのではないか、と藤吉は云つた。

「植木を逆さまに植えたつて」と去定が反問した、「おまえ見たのか」

「見ました、みんな根を上にして植えてあるのです」

去定は登を見た、「おまえはどう思う、やっぱり狂気だと診るか」

「わかりませんが、女のことが重なつて、頭の調子が狂つたのではないかと思いました」

「違う、女ではない、藤吉だ」

登はけげんそうに去定を見返した。

「猪之は小さいじぶんから女にちやほやされた、おとなになつてからも、女のほうから惚れてくるという、おれは診察をしながら

ようすをみたが、猪之はすっかり藤吉におぼれているのだ」と去定は云った、「女に好かれるあまり、女に向ける愛情が藤吉のほうにひきつけられた、これはむろん色情ではない、男が男に感じる愛情だが、猪之のばあいはそれが強く、複雑になっているだけだ」

「そうしますと、いまは藤吉といっしょにくらしているのですから、症状がよくなる筈ではないでしょうか」

「いや、反対だ、藤吉からはなさなければいけない」と去定は云った、「これまで猪之のして来たいろいろなことは、みんな藤吉を困らせるためにやったことだ、自分ではもちろんそうは思わないだろう、しぜんになつたと信じているだろうが、心の底で

は藤吉を困らせることで藤吉にあまえ、藤吉と自分とを繋つないでおこうとしていたのだ」

登は黙って眼をおとしたが、やがてそつと、あいまいに頷いた。「明日こつちへ引取ってやろう」と去定は机のほうへ向き直って、筆を取りながら云った、「藤吉とはなして、暫く放っておけばよくなるだろう、——人間の頭脳のからくりほど、神妙でふしぎなものはないな」

翌日、猪之は養生所へ引取られた。

藤吉には去定の診たてを告げて、決してみまいに来ないように、と念を押した。登は去定の診断をあまり信じなかつた。なんとなく理詰めすぎるし、都合よく付会しているように思われたので、

登は登の立場から治療の手掛りをつけようと考えた。——猪之は一人だけべつの部屋へ入れた。当人がほかの者といっしよではないやだ、特に病人でも年寄でも、女のいるところは困ると云い張つたし、去定もそれがよかろうと、好きなようにさせたのである。

それから夏いっぱい、登は暇をみつけては彼の部屋へゆき、茶菓子をすすめたりしながら、さりげなく話しかけ、また彼から話をひき出すようにした。

「誰もみまいに来ないな」と或る日、登は暗示をかけた、「誰かみまいに来てもらいたい者はないのか」

猪之はむずかしい顔つきで考えこんだ。

「佐久間町が来そうなものじゃないか」と登はもう一と皮切り込

んでみた、「来てくれるように使いを出そうか」

「いや、よしましよう」猪之はきつぱりと首を振った、「あにきはいそがしいからだだし、来てもらったってどうということもねえから」

登はそこでその話を打ち切った。

夏を越すころになってもようすに変化はなかった。殆んど部屋にこもったきりで、夕方ちよつと庭へ出るほかは、なにもしないでぼんやり時をすごしている。

以前のような奇矯なまねをしないというだけで、かいふく恢復に向かうという兆きざしは少しも認められなかった。

「どうして女が嫌いなんだ」登はそう訊いてみた、「男でいて女

が嫌いだななんておかしいじゃないか」

「嫌いじゃねえさ」と猪之は答えた、「女は嫌いじゃありませんよ」

「だってここへはいるとき、病人でも年寄でも女のいるところはいやだと云つたらう」

猪之はちよつと考えてから頷いた、「ああそうか、そんなところがおかしいんだな」

「おかしいとは、自分のことをいうのか」

「わけはあるんですよ」と猪之は云つた、「こんなことは人に話すもんじゃねえだろうが、お医者先生の先生に話すんらいいでしょ」

「もちろんだ」と登は云った。

## 八

「あつしが十八の年のことでした」と猪之は云った、「頭とうりよう梁りやうのうちに娘が二人いるので、近所の女の子がよく遊びに来るんです」

登は藤吉の話を思いだしたが、むろんそんなけぶりほみせず、できるだけ無関心をよそおつて聞いていた。

「その中に玉川屋という紺屋こうやの娘で、九つになるおたまという子がいたんです、からだも顔もまるくぽっちやりとしていて、気性

もおとなしいすなおな子でしたが、——いやだな」と云つて猪之は赤くなつた、「ここからが云いにくいんだ」

「私は医者だよ」

「悪く思わないで下さい」と猪之はうしろ頸くびを手で撫なでながら云つた、「そのおたまがひどくあつしになついちやつて、まあそんなことはどうでもいいが、あつしのほうでも可愛い子だと思つてました、それでまあいろいろあるんだが、或るとき抱きついてきたんで、ひよいと唇を吸つてやつたんです、いえ、勘ちげえをしねえで下さい、決していやらしい氣持でやつたんじゃあねえ、いつも可愛いと思つていたし、抱きつかれたとたんなんの氣もなく、ただひよいとやつちやつただけなんですから」

「珍らしくはないさ」と登がいった、「誰にだってそのくらいの覚えはあるだろう」

「ところがそのあとがいけねえ」と猪之はひどく早口で続けた、まるで話しているそのことから逃げだそうとでもするように、

「あつしが唇を吸ったとたん、おたまがあつしの口へ舌を入れて来た、九つの子ですぜ」そして彼はぐいと唇を拭き、唾でも吐きそうに顔を歪めた、<sup>ゆが</sup>「——あつしは十八だったが、そんなことはなんにも知らなかった、ことに相手はまだ九つだったし、ただおとなしくつてすなおな、可愛い子だと思つていただけなんですから、柔らかくて熱い小さな舌がすべりこんできたときには、あつしはとびあがるほどびっくりして、おたまを突き放すなり逃げ

だしちまいました」

登は静かに笑いながら云った、「珍しいことじやあないさ」

「珍しいことじやあねえって」

「私にも覚えがある」と登は云った、「似たようなことが私にもあつたよ」

猪之はいま眼がさめたというような顔で、へえといいながら登を見た。

「それで」と彼は問いかけた、「そんなことがあつても先生は、なんとも感じなかつたんですか」

「ちよつとまごついたかもしれないがね」

「あつしはおつそろしくこわくなつた」と猪之は云った、「九つ

ぐらいでこんなことを知ってる、女なんておっかねえもんだ、ひでえもんだって、おぞ毛をふるいましたよ」

「下町育ちで職人のくせに」と登はまた笑いながら云った、「おまえはまたひどくおくてだったとみえるな」

「そうですかね、へえ」と猪之は首をかしげた、「そんなもんですかね」

「そんなものらしいな」と登は云った。

登はここが治療の手掛りだと思った。

去定の診断にも一面の理はあるが、それだけではない、女に惚れては逃げる、ということの繰り返しには、おたまとの出来事が深く頭にひっかかっている。

それさえ除けば恢復かいふくに向かうだろう、と登は信じた。——登の診断が正しかったかどうか、秋にはいつてまもなく、登は庭で珍らしいことをみつけた。猪之は夕方にいちど、外へ歩きに出ていたが、登が偶然みつけたとき、彼は手籠を提げて、一人の女といっしょに歩いていた。

「ほう」と登は思わず眼をみはった。

女はお杉であった。あるじおゆみの夕食を取りに来て、戻るところだろう、猪之の提げている手籠は食事を運ぶもので、まえから登は見馴れていた。

猪之はお杉となにか話しながら、おゆみの住居のほうへと去つてゆき、登はそのまま自分の部屋へはいった。

登は森半太夫に、猪之のすることを見張つてくれるように頼んだ。自分は去定の供で、外診に廻るときのほうが多いからである。半太夫もひまは少ないが、それでもよく注意しているらしく、その日その日のことを詳しく知らせてくれた。——猪之は明らかに変り始めた。部屋にこもっていることが少なくなり、外へ出てなにかかにかする、薬園へでかけて行って、のこぎりかんな鋸や鉋を借りだし、柵さくの毀れを直したり賄所の羽目板を打付けたりする。

朝夕はきまつて、お杉の手籠を持ってやるし、たびたび賄所へ行って刃物を研といだり、まないた板を削つたり、ときには菜を洗う手伝いまでする、ということであつた。

——それならもう安心だ。

まもなく元のようになるだろう、そう思ったので登はしげんと猪之のことを気にかけてなくなった。そうして九月中旬になった或る夜、外診から帰った登が着替えをして、おくれた食堂へはいろいろとすると、猪之が追つて来て呼びとめた。

「酒があるんですがね」と彼は囁き声で云った、「一杯つきあつてくれませんか」

「酒だつて、——どうしたんだ」

「吉つあんに頼んだんです」と猪之は唇で笑つた、「貴方あなたもまえには、よく酒を買わせたそうじゃありませんか」

登は眼をそむけた、「おれは腹がへつてるんだ」

「鮓すしもありますぜ」と猪之が云つた、「まあ来て下さい、じつは

ちよつと話したいこともあるんだから」

登は彼の部屋へいった。

久しく来なかつたが、部屋の中はきちんと片づき、掃除もゆき届いて、気持のいいほどきれいになっていた。

膳の上には定きまつた食事のほか、折詰きの鮓があり、脇には五合徳利が置いてあつた。もちろん爛かんはできない、冷やのまま飲み始めていたらしく、猪之は坐るとすぐに、湯吞ゆのみに残つた酒を飲んで、それを登に差した。おれはだめだ、と登は手を振り、話というのを聞こう、と云つた。

「じゃあ、もうちつと飲まして下さい」と猪之は云つた、「もう少し酔わねえと、ちよつと云いにくい話なんだから」

登は静かに云った、「お杉のことか」

「うっ」と云つて猪之は登を見た、「知つてらつしやるんですか」

「詳しいことは知らないが、見当はつくよ」

「へえー驚いたな、そうですね、そんならもうかしこまるには及ばねえ、云つちまいましょう」猪之は湯呑に酒を注ぎ、それを両手で持つてまともに登を見た、「まず、あつしを当分ここに置いてもらいたいんだが、どうでしょうか」

「それはおれの一存にはいかないな」

「用はします、あつしで出来ることならなんでもするし、ここには大工の一人ぐらい雇つておく用が結構ありますぜ」

「そうらしいな」と登は云つた、「それでその次はなんだ」

「いますぐつていうわけじゃあねえが」猪之の顔がさつと赤くなり、彼は湯呑の酒をぐつと飲んだ、「まだ相手にもなんにも云やあしねえんだが、——鮎を一つ摘みませんか」

登は思わずふきだした、「つまり、お杉を嫁に貰もらうというのか」

「可哀そうなんだ」と猪之は云った、「あんな気の違つた主人に仕えて、飯のあげさげからおかわの世話まで、いつ終るとも知れねえことを辛抱してやっている、あつしは見ているだけで胸がきりきりしてくるんです」

「すると」と登が訊いた、「哀れだから貰つてやろうというのか」  
「とんでもねえ、冗談じゃあねえ」猪之はむきになつて云い返した、「可哀そうなことは慥かだが、嫁に貰いてえのは好きだから」

だ、あつしはこれまでいろいろ女を見てきたが、お杉のような女は初めてだし、お杉となら一生どんな貧乏ぐらしをしてもいいと思う」

登は黙っていた。

「ほんとですぜ」猪之の眼がうるんでき、彼は軀を固くして云つた、「——お杉を見てから、あつしはしつかりしなくちやあいけねえと思いましたが、やいしつかりしろ、これまでのようなあまっちよろい考えでいては、この世の中を渡つちやあいけねえぞつて、……初めてです、生れてからこつち、こんな気持になったのは初めてなんです、あつしはお杉を仕合せにしてやりてえし、きつと仕合せにしてやれると思うんです」

「そう云いきつてもいいのか」

「あにきに訊いて下さい、こんなことを口にするのは初めてだし、お杉さえいてくれたら、この気持は金輪際変りやあしませんから」  
そうだろう、と登は思った。

——彼は初めて愛する立場に立った。

これまでは藤吉に庇かばわれ、女たちからさそいかけられた。いつも受身だったのが、こんどはお杉に憐あわれみを感じ、お杉を仕合せにしてやろうと思ひ始めた。それは彼が、男として独り立ちになろうとする証拠であろう。登はそう思ひながら、それでも念のためくぎに釘を刺してみた。

「三度目の正直というところか」

猪之は不審そうに見返した、「なんです、その三度目の正直つていうのは」

「いいよ」と云つて、登は微笑しながら立ちあがつた、「なんでもない、気にするな——いまの話は新出先生と相談してみる」

「お願いします」猪之は頭をさげ、それから昂こうぜん然と云つた、

「断わつておきますが、もしいけねえなんて云われたら、お杉を伴れて逃げますからね、これは威おどかしじゃあねえ本気なんだから、先生にもどうかそう云つといて下さい」

登は彼の眼に頷き、それから廊下へ出ていった。



# 青空文庫情報

底本：「山本周五郎全集第十一巻 赤ひげ診療譚・五瓣の椿」新  
潮社

1981（昭和56）年10月25日発行

初出：「オール読物」

1958（昭和33）年8月

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：北川松生

2018年8月28日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<https://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 赤ひげ診療譚

三度目の正直

2020年 7月13日 初版

## 奥付

発行 青空文庫

著者 山本周五郎

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>